

# 若き附中

令和3年3月16日(火)

熊本大学教育学部  
附属中学校  
学校だより  
第20号  
文責(高木)

## 卒業生代表挨拶

3月12日の卒業式にて、前生徒会長の小島君が卒業生を代表して挨拶をしてくれました、すばらしい内容でしたし、挨拶の中には、一・二年生へのメッセージもありましたので、紹介したいと思います。

一・二年生の皆さんは、今日で令和2年度のそれぞれの学年の教育課程の修了となりませう。この一年、一杯がんばる皆さんの姿は、たいへん立派でした。四月からは、さっとすばらしい一・三年生になります。

### 卒業生代表挨拶

本日は私たちのためにこのような素晴らしい式典を挙げていただきありがとうございます。附属中学校での三年間は私たちにとって忘れられない思い出の時間です。ここでは会場の皆様とともに、私たち卒業生の附属中学校での思い出をタイムスリップして振り返ってみたいと思います。



三年前の晴天の日、私たちは附属中学校の門をくぐり、中学生としての生活をスタートさせました。うれしさと不安が入り混じり、緊張していた私たちが昇降口の「夢は叶う」という文字

が迎えてくれ、中学校生活への期待が一層膨らんだのを覚えています。入学後すぐに行われ、みんなと仲良くなるきっかけとなった集団宿泊。はじめての三大行事では先輩の姿が大きく感じられ、附属中学校の特色である統の繋がりの良さを知ることができました。二年生になると学校を引く張る立場になることも多くなり附中生であるという自覚も次第に大きくなっていきました。秋には生徒会を引き継ぎ、私たちは「繋ぐ」という言葉を生徒会の目標にかけました。しかし、この時にはまだ、この「繋ぐ」ということがいかに大変で大切なことを本当の意味で思い知らされようとは夢にも思っていなかったのです。二月には職業体験が予定されていました。その体験先への挨拶もすませ、後は当日を待つばかりの時でした。

突然の職業体験中止。そして時をまたましての休校。正直に言うと最初の数日はちよつと得をしたような気持ちもありました。しかしお世話になった先輩に十分なお別れもできないまま、私たちは最高学年となり、クラス替えが行われても、クラスメートと会うこともなく、休校が続きました。次第に体育大会は？中体連は？受験は？最高学年になり、楽しみにしていた学校生活はどうなってしまうのだろうと不安な気持ちが強くなっていきました。そのような中、附属中ではいち早くリモートでの授業が開始され、これまでにない形で家にいながら学びつつけることができるようになりました。モニター越しではありますが、私たちがみんなと繋がることができました。学活の間はリモートならではの家の物のしりとりや先生のギター演奏、マイホームやお子さん、愛犬の登場など先生を身近に感じることができ、クラスメートとも楽しい時間を過ごしました。このように大変な状況下でもこれまで通りの時間をす

ぐし、夏休みも短縮されず学び続けることができただのも先生方のおかげです。職業体験に行けなかった私たちですがこの一年先生方を間近で見ている「働く」ということについて考えました。「働く」という字は人のために動くことと書きます。また、「はた」「つまり」「まわり」を築く、楽しくするという人もいます。まさに先生方は、我々生徒のためにご自分の力を惜しみなく使ってくださいました。我々が知りえる何倍もの時間を費やし、試行錯誤を繰り返してくださった先生方、制限された環境の中で私たちの学びを止めず私たちの日常を守るため新しいこと、前例のないことに挑戦し続ける先生方を間近で見ても「働く」ということを、身をもって教えてくださったように思います。

これからは予防接種や治療法が確立し、コロナが重要な感染症ではなくなったとき、私たちはコロナ世代、かわいそうな世代と思われるかもしれませんが、確かに残念だったことや不安だったこともありました。しかし、私たちは先生方のおかげで今までは違う形ではありましたがすばらしい授業を受け続けることができました。また、より日常に近い状態でみんなと繋がりが学校生活を送ることができました。そして受け身の授業ではなく、自ら情報を選択し、自分に今できることは何かを考え実行する力もつけることができたと思えます。私たちはこれからの時代に必要と思われ

る力を中学校で体験することができた貴重な世代であり、決してかわいそうな世代ではありません。それこれもピンチをチャンスに変えるように導いてくださった先生方のおかげだと思えます。本当にありがとうございます。

保護者の皆様、三年間の中で意見が対立し素直になれなかったことも多くありました。しかし、どんなに怒っていても次の日のお弁当は愛情と

声援が詰まったおいしいものでした。そのお弁当のおかげでこんなになくましくなり心も体も大きく成長することができました。どんな時でも一番そばにいてくれた家族。私たちが落ち込んでいた時は誰よりも心配してくれました。そんな家族には感謝の思いでいっぱいです。これからも私たちの一番そばで見守ってくれたいと思います。

在校生の皆さんは、いつも私たちを支えてくださいました。これまでの先輩たちが築き上げてきた附中の伝統を引き継ぐとともに、新たな伝統を創り上げていってください。直接メッセージを伝えることはできませんが、これからの皆さんの活躍を楽しみにしています。

そしてともに苦楽を乗り越えてきた三年生の皆さん。いよいよお別れの時が迫ってきました。時には仲間として、時にはライバルとして切磋琢磨した附属中での三年間は私にとって宝物です。笑ったり、泣いたりたくさん思い出が胸に刻み込まれています。この宝物を得たからこそ「響き合う」という本当の意味が理解できたような気がします。これからの高い志を持ち前へと進んでいきましょう。

工夫が凝らされた日々の授業、最後まで全力を尽くした部活動、全員で力を合わせて盛り上げた三大行事。その一つ一つが私たちの思い出であり力となりました。これから、私たちはそれぞれの夢に向かって突き進んでいきます。附属中での学びを生かし、いつか附属中学校に恩返しできるようにして私の答辞とさせていただきます。皆様本当にありがとうございます。いつの日か皆様とマスクをとり大きな声で笑いながら昔話ができる日を楽しみにしています。

令和三年三月十二日 卒業生代表 小島

※この一年、若き附中を、愛読していただき、ありがとうございます。今年も、たくさんの方の生徒諸君に助けられ、学校だよりを発行することができました。